

# 鳥羽離宮跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報

二〇〇三

一一

鳥羽離宮跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 鳥羽離宮跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび収蔵庫建設に伴います鳥羽離宮跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

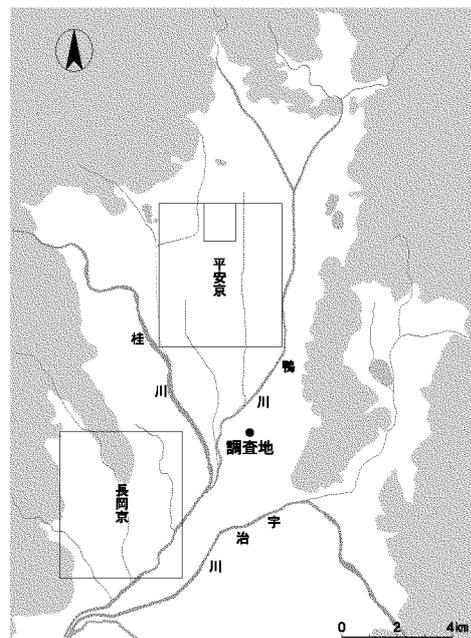
平成16年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 鳥羽離宮跡（148次調査）
- 2 調査所在地 京都市伏見区竹田内畑町
- 3 委託者及び承諾者 安楽寿院 斉藤亮秋
- 4 調査期間 2004年1月15日～2004年2月17日
- 5 調査面積 120m<sup>2</sup>
- 6 調査担当職員 平尾政幸・山口 真
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「城南宮」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前につけた。
- 13 遺物番号 挿図の土器類・瓦類の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 作成担当職員 平尾政幸・山口 真



（調査地点図）

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	2
3. 遺 物	5
4. ま と め	9

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 1 面全景（北から）
		2	第 2 面全景（北から）
図版 2	遺跡	1	第 3 面全景（北東から）
		2	SX56下層杭列（北東から）
図版 3	遺物		出土軒瓦
図版 4	遺物		出土軒瓦・鬼瓦

# 挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査前全景（北から）	2
図 3	調査風景	2
図 4	第 1・2 面遺構平面図（1：200）	2
図 5	SX10（西から）	3
図 6	SX10実測図（1：50）	3
図 7	第 3 面遺構平面図・北壁土層図（1：100）	4
図 8	SX56出土土器実測図（1：4）	6
図 9	軒瓦・鬼瓦拓影・実測図（1：4）	9

## 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	3
表 2	遺物概要表 .....	5
表 3	SX56下層出土土器の構成 .....	7
表 4	SX56上層出土土器の構成 .....	8

## 付 表 目 次

付表 1	SX56下層出土土器一覧表 .....	10
付表 2	SX56上層出土土器一覧表 .....	12

# 鳥羽離宮跡148次調査

## 1. 調査経過

調査地は京都市伏見区竹田内畑町安楽寿院南西部の一角である。調査対象となった場所は同院境内地の西方にあたり、鳥羽天皇陵の東、近衛天皇陵の北に位置する。東方には安楽寿院本堂や三宝荒神社が所在する。当地を含む周辺は院政期鳥羽離宮東殿の推定地であり、また当地には江戸時代後期の古図よれば安楽寿院の塔頭の一つである玉蔵院が存在していた。

昭和51年度には、この地を菜園とするために一部今回の調査区を含む東と南側で緊急調査が行われている（15次調査）。この調査では、宝蔵院客殿の一部や池跡など江戸時代後期の遺構が検出されたが、菜園として使用する限りにおいては下層の遺構に影響はないと判断され、この時点で調査を終了している。その後、菜園としての利用を終え空き地となっていたが、このほど同地に安楽寿院収蔵庫の建設が計画され、その基礎工事などにより下層遺構に影響が及ぶことが明らかになったため、東および南の一部が15次調査と重複する位置に南北12.8、東西10.8の調査区を設定し、発掘調査を実施した。

調査の結果、玉蔵院あるいはその北側に位置した金蔵院に関連すると思われる石組み遺構（排水施設）や礎石列、戦国時代後期から江戸時代初期の整地層を検出し、さらにその下層では鳥羽離宮期の池の岸部らしい湿地状の堆積を確認した。

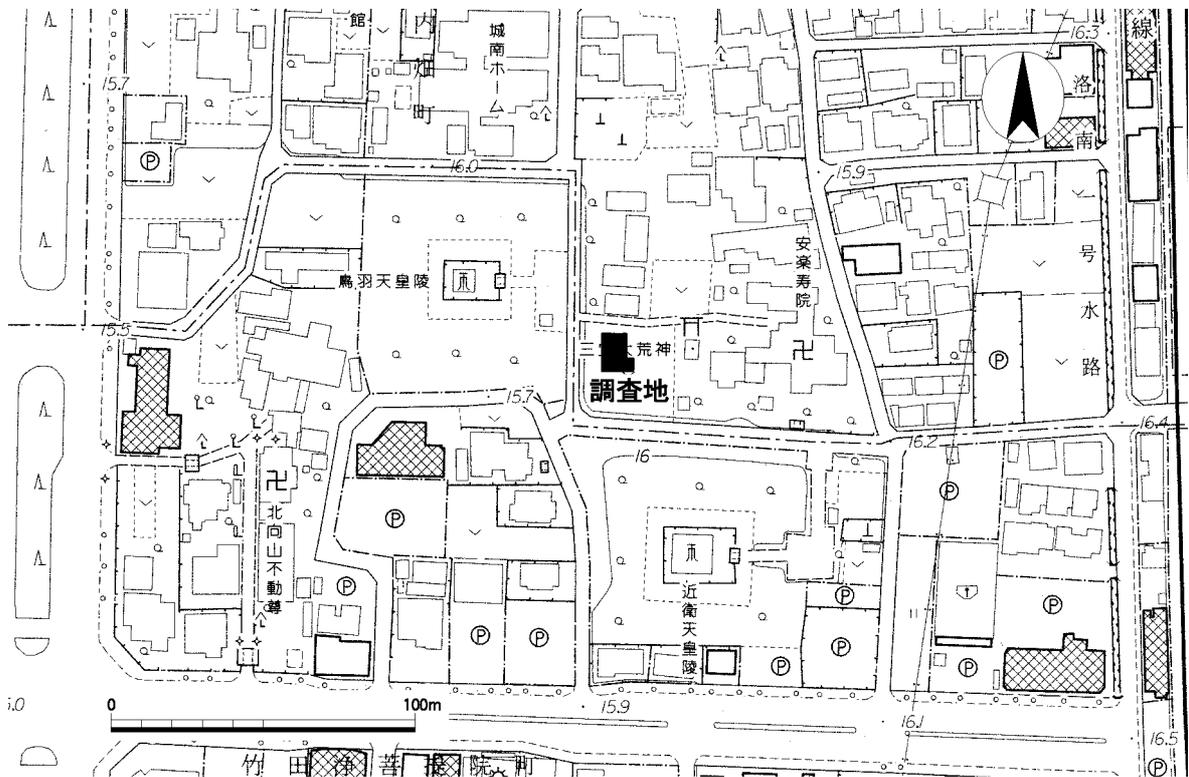


図1 調査位置図(1:2,500)



図2 調査前全景（北から）



図3 調査風景

## 2. 遺 構

今回の調査で検出した遺構群は、江戸時代後期（第1面）、桃山・江戸時代初期（第2面）、室町時代後期（戦国時代 - 第3面）、さらに下層の平安時代後期（鳥羽離宮期）のものに分けることができる。

### 江戸時代後期

第1面で検出した江戸時代後期の遺構には、耕作関連と思われる小溝が数条と土壇、配水施設と思われる石組み遺構（SX10）および小礎石列などがある。このうち小礎石列は15次調査で検出していたものである。

小溝は東西方向のもの（SD3など）が主体で、いずれも幅0.3～0.5、深さは0.1内外の小規模なものである。

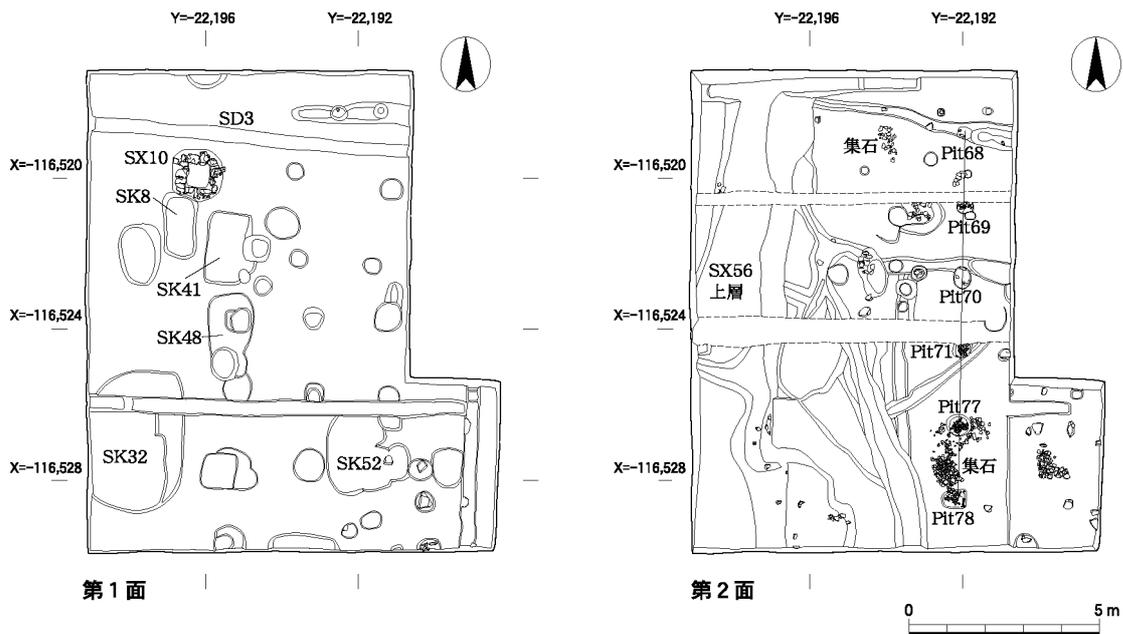


図4 第1・2面遺構平面図（1：200）



図5 SX10(西から)

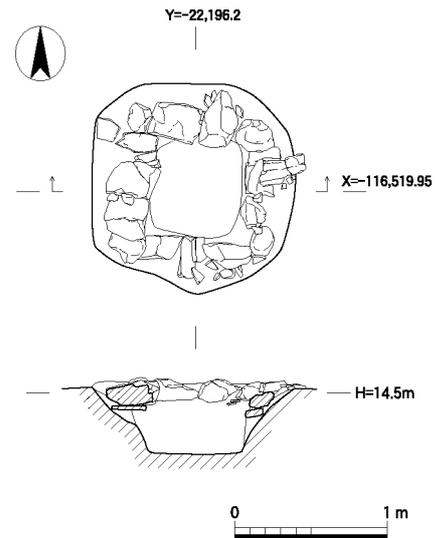


図6 SX10実測図(1:50)

SX10は長径30cm前後の石材を方形に組み合わせた遺構で、石組みは1段確認しており、下部は素掘りである。東西2方向に導水部とみられる丸瓦あるいは瓦質の土管が残存していた。両側の導水部の高さがほぼ等しく、浸透桝的な性格の遺構と思われる。検出位置は玉蔵院内か、あるいはその北側にあった金蔵院との境界付近に当たり、どちらに属する施設かは明らかではない。

桃山・江戸時代初期

桃山・江戸時代初期(第2面)の遺構には、南北方向の根石列、整地層および流路(SX56上層)などがある。

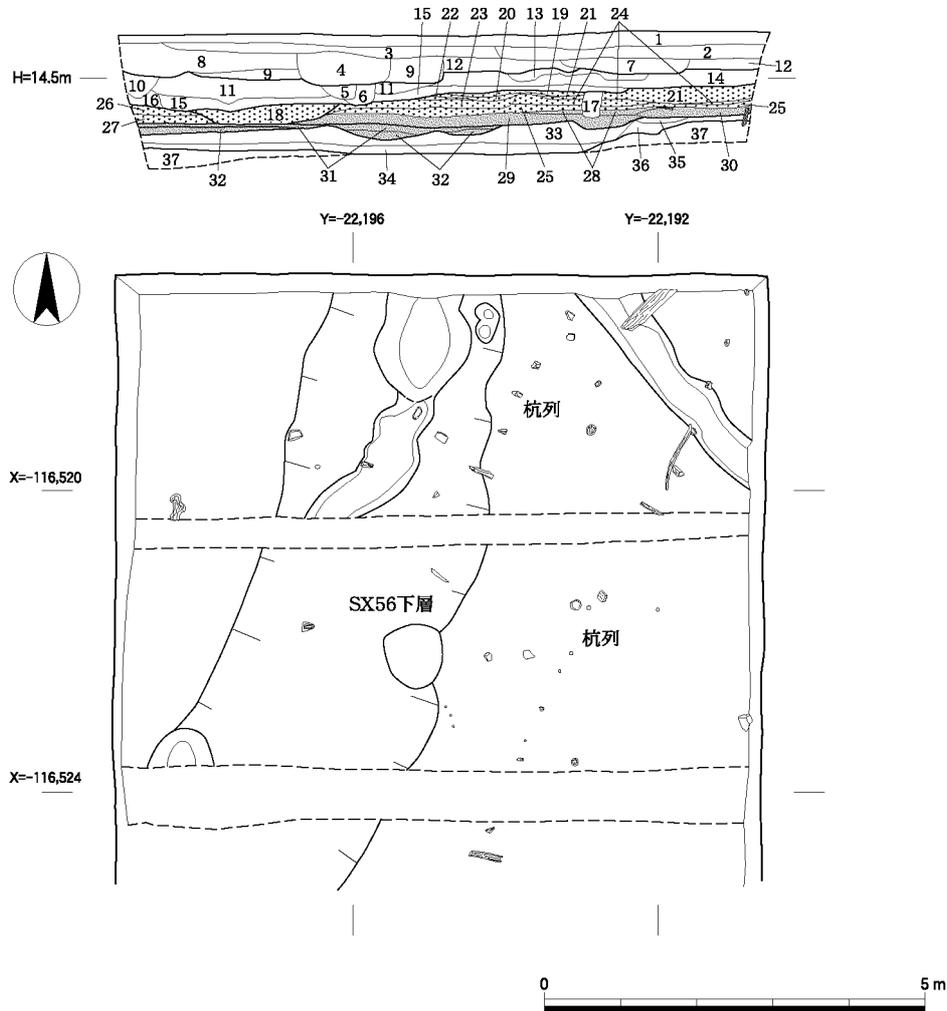
根石列の南部のPit77・78は、上層で検出している小礎石列(15次調査で確認していたもの)の線上に揃うが、検出面が異なることや、後者には根石が無く設置の工法に差がある点などからみて、15次調査で検出した建物の前身建物の可能性がある。

この小礎石列やその他の遺構の基盤をなす面は、下部で検出した自然流路(SX56下層)の上部に施された数度の整地によって成立しているとみられる。上面の一部に焼土の分布がみられたが、面的な広がりには認められず、遺構面自体が火を受けたものではなく他の場所から整地土として運ばれてきたものであろう。

表1 遺構概要表

時代	遺構
平安時代後期	池岸
室町時代後期	自然流路、整地層
桃山・江戸時代初期	根石列、整地層、流路
江戸時代後期	小溝、土壇、石組み遺構、小礎石列

調査区西方に検出したSX56上層は幅約2.0～2.5、深さ0.3の南北方向の流路で、上記の整地層を切って成立している。堆積土は暗黄灰色の粘質土で、この土層や整地層最上部からは桃山・江戸時代初期の土器類などが出土している。整地層上面には、この流路からあふれた水の流れと思われる痕跡が数条認められた。



- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 10YR3/1黒褐色泥砂 (耕土)                     | 20 7.5YR4/4褐色、沈着した鉄分        |
| 2 7.5YR4/2灰褐色砂泥、小礫多く含む                  | 21 7.5YR5/1褐灰色泥砂            |
| 3 7.5YR4/1褐灰色砂泥、棧瓦含む                    | 22 10YR6/1褐灰色泥砂             |
| 4 7.5YR4/2灰褐色砂泥、礫・瓦混 (SK 9)             | 23 10YR6/1.5灰黄褐色粘土          |
| 5 7.5YR5/1褐灰色泥砂・10YR6/4黄橙色細砂のMix (SD61) | 24 10YR5.5/1褐灰色粘土           |
| 6 10YR4/1褐灰色泥砂、やや粘質、炭多く含む               | 25 2.5Y5.5/1黄灰色粘土           |
| 7 10YR6/3黄灰色細砂、下部に小礫が堆積                 | 26 10YR5/1.5灰黄褐色粘土          |
| 8 7.5YR4/2灰褐色砂泥                         | 27 2.5Y5.5/1黄灰色粘土           |
| 9 7.5YR5/2.5灰褐色砂泥、礫を含む                  | 28 7.5YR4/1褐灰色腐植土           |
| 10 10YR4/1.5灰黄褐色砂泥 (SD60)               | 29 7.5YR4/1褐灰色粘土            |
| 11 7.5YR5/2.5灰褐色砂泥、小礫を含みよく締まる           | 30 10YR4/1褐灰色泥砂、微細粒粘質       |
| 12 10YR6/3.5にぶい黄橙色砂泥、細砂混                | 31 5B5/1青灰色粘土               |
| 13 10YR5/1褐灰色微砂、炭小片含む                   | 32 5B4/1暗青灰色粘土、径3～5cmの石多く含む |
| 14 7.5YR4.5/2灰褐色砂泥、細粒、土師器・炭の小片含む        | 33 10BG4.5/1緑灰色粘土、均質        |
| 15 10YR5/1褐灰色泥土                         | 34 10BG4.5/1緑灰色微砂           |
| 16 7.5YR5/1褐灰色泥土、細粒均質                   | 35 5PB4/1暗青灰色泥土、小礫・細砂混      |
| 17 10YR5/1褐灰色泥土、上面は鉄分の影響を受けて黄褐色         | 36 10BG4/1暗青灰色泥砂、砂礫混        |
| 18 2.5Y4/1暗黄灰色粘土                        | 37 7.5YR7/4にぶい橙色砂礫          |
| 19 7.5YR6/1褐灰色細砂、瓦片混                    |                             |

(11・15・16：桃山・江戸時代整地、18～27：SX56上層、28～32：SX56下層、33～36：鳥羽離宮期の池)

図7 第3面遺構平面図・北壁土層図(1:100)

### 室町時代後期

室町時代後期の遺構は、鳥羽離宮期の池跡に成立した自然流路（SX56下層）と、それを埋め立てた整地層である。この流路の方向は北西から南東に向かっており、底部ではその方向に沿った杭列を2ないし3条検出している。

北壁の堆積状況からみて、東側から護岸を施しながら数度にわたって段階的に埋め立てが進められたものと思われ、室町時代末期には南北方向の流路（SX56）として遺存していたが、桃山期にはその部分も埋め立てられたようである。この流路の堆積土や整地層下部から16世紀中頃から後半の土器類が出土している。

### 平安時代後期

北壁および西壁に沿って設けた断ち割りトレンチでの観察の結果、SX56下層の下部には池岸の一部が確認でき、調査区南西隅ではさらに南西方向へ落ち込む肩部と腐植土の堆積を認めた。肩部の標高（13.1 前後）は、131次調査などで確認している鳥羽離宮期の池跡と一致しており、池あるいはそれに続く流路がこの位置に存在していたことが判明した。

## 3. 遺 物

遺物は整理箱15箱出土している。その内容は土器・陶磁器・瓦類である。量的には瓦が最も多い。瓦の大半は江戸時代後期のものと平安時代後期に属するもので、後者は鳥羽離宮関連の遺物と思われるが、直接遺構に伴うものではなく、後世の遺構や整地層からの出土である。

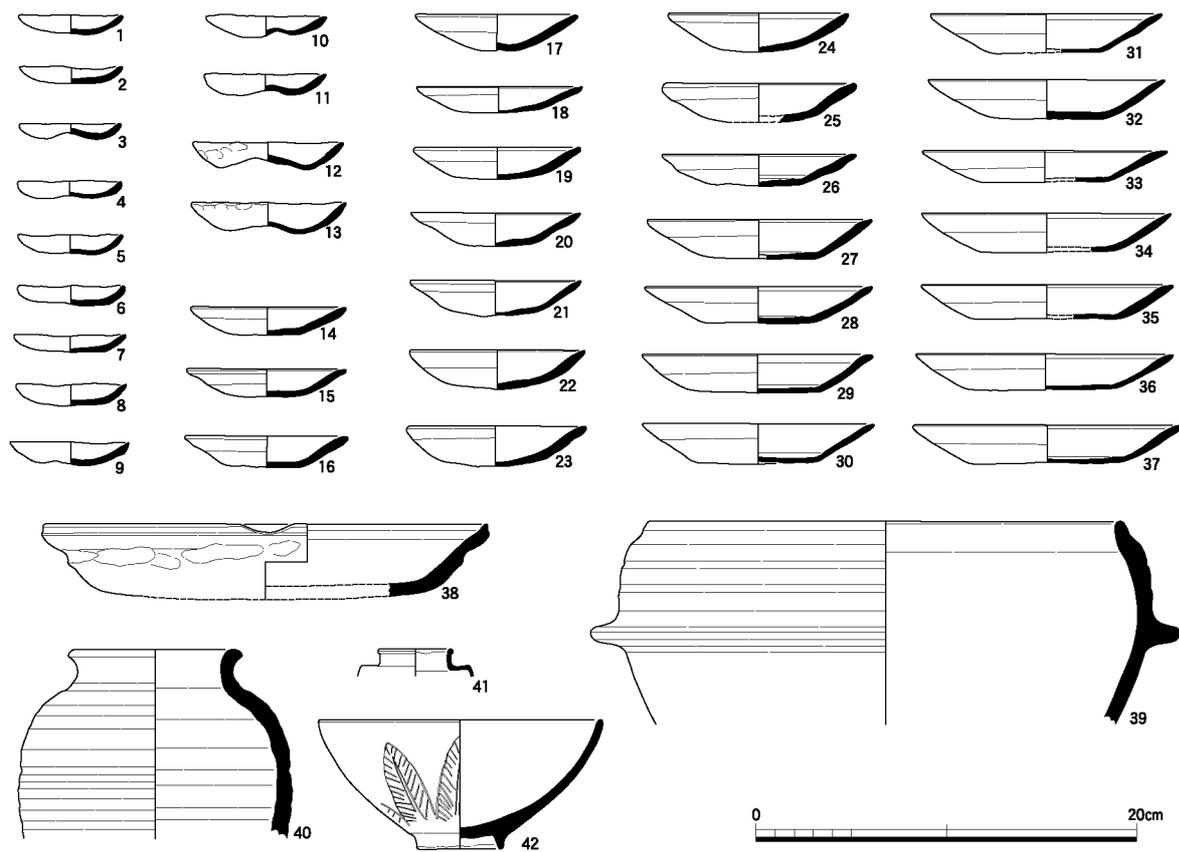
土器類は主に16世紀中頃から17世紀前半に属するものが多い。土師器が主体を占めるが、白磁、青磁、染付磁器など輸入陶磁器や、志野、唐津などの国産陶磁器も少量出土している。瓦同様整地層からの出土量が多い。以下、出土遺物の主要なものについて概説する。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代後期	丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦 鬼瓦	7箱	軒丸瓦8点、軒平瓦4点、 鬼瓦2点	1箱	5箱
室町時代後期	土師器・瓦器・青磁・国産施 釉陶器(美濃)・焼締陶器	6箱	土師器37点、瓦器2点、施釉 陶器1点、焼締陶器1点、青 磁1点	1箱	4箱
桃山・ 江戸時代初期	土師器・瓦器・白磁・染付磁 器・国産施釉陶器(美濃・唐 津)・焼締陶器		土師器14点、塩壺2点、土師 器ミニチュア1点、瓦器2点、 施釉陶器2点、明染付2点、 白磁1点、焼締陶器1点		
江戸時代後期	丸瓦・平瓦・土師器・国産陶 磁器	4箱		0箱	4箱
計		17箱	81点(2箱)	2箱	13箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

SX56下層



SX56上層

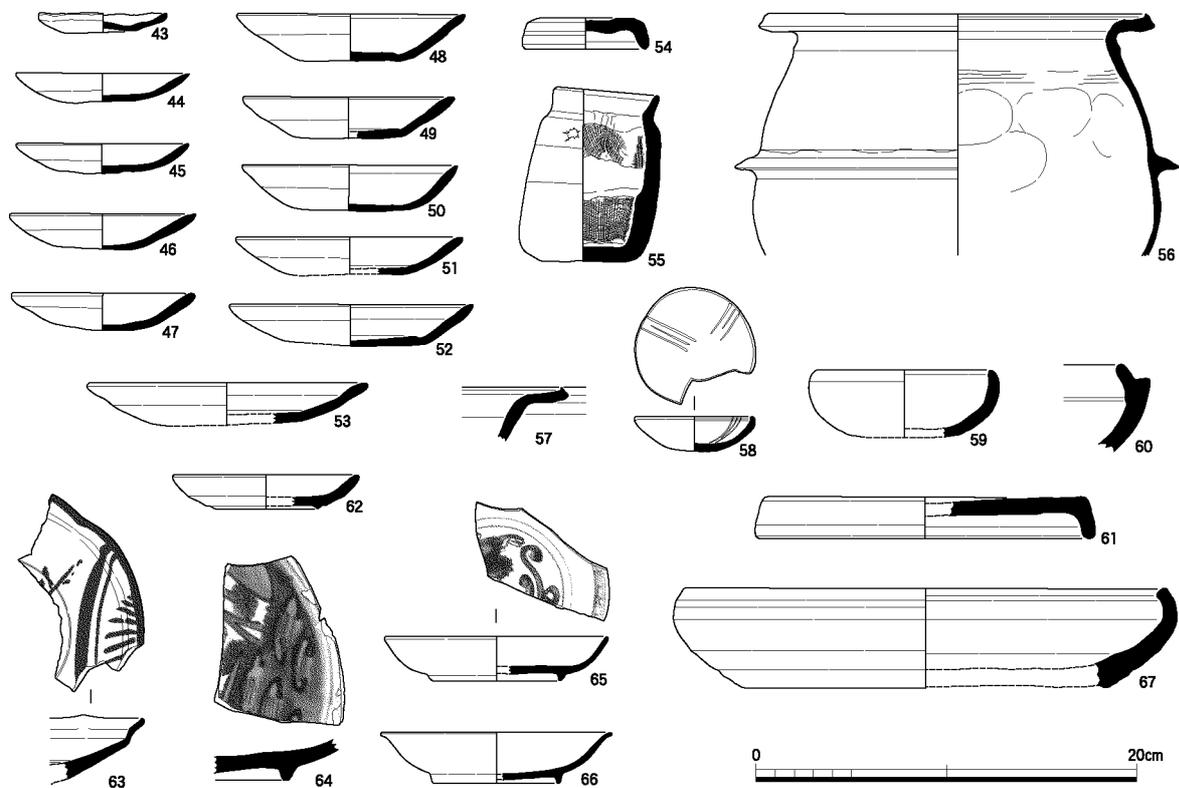


图8 SX56出土土器実測图(1:4)

SX56下層出土土器類（図8、表3、付表1）

土師器・瓦器・国産施釉陶器（美濃）・焼締陶器・輸入陶磁器がある。大半が土師器の皿で、他は非常にわずかである。

土師器には手捏ね化した皿Nr（1～13）、内面の立ち上がり部に圏線のない皿Sb（14～24）、立ち上がり部に圏線を施す皿S（25～37）がある。皿Nrには口径5～6cm台と8cm前後の2群があり、後者は少ない。皿Sbは口径が8.2～9.5cmまでのものがある。皿Sには、口径が10cm台前半のもの、12cm前後、13cm前後、14cmを超えるものの4群が認められる。これらの土師器皿群には天文法華の乱に関連する本園寺濠上層出土の土師器と共通した特徴を持つものと、わずかに後出的に見えるものが含まれており、およそ16世紀半ばから後半に位置づけられるものであろう。

瓦器焙烙（38）は開いた浅い体部を持ち、16世紀代前半にみられる体部が開き口縁の受け部が退化した瓦器鍋がさらに浅くなったような形態である。内面にわずかにコテ跡の痕跡が残る。瓦器羽釜（39）は全体にやや厚めに成形されている。口縁部外面に2段の凹線を巡らせる。瓦器にはこのほか火舎あるいは火鉢があるが、細片のため図示できなかった。

焼締陶器は備前の壺（40）の他、信楽の壺・擂鉢や生産地不明の甕片が出土している。備前の壺は口径9.2cmのやや小振りな製品で、胴部の内外にロクロ目が強く残る。焼成は堅緻だが、自然釉は生ぜず表面はつやがない。

美濃鉄釉茶入は非常に薄く挽かれ、焼成は硬質である。同一個体の体部片が出土しているが、直接接合しない。

輸入陶磁器には図示した青磁椀（42）のほか白磁や染付椀皿類がある。青磁椀は明るい透明感のある淡緑色の釉が全体に施され、外面にはこの時期の染付椀によく見られるような脈のある連弁文が施されている。

SX56上層出土土器類（図8、表4、付表2）

土師器・瓦器・国産施釉陶器（美濃・唐津・軟質施釉陶器）・焼締陶器・輸入陶磁器がある。SX56下層土器類と同様に土師器が多数を占め、他の種類の土器類は少ない。

土師器には皿Nr（43）、皿Sb（44～47）、皿S（48～53）がある。それぞれの特徴はSX56下層の土師器皿類と類似するが皿Sの口径が縮小していることや、全体にやや厚づくりになっている点からみて明らかに新しい型式群である。

表3 SX56下層出土土器の構成

種類	器形	破片数	比率	
土師器	皿	1464	96.3%	
	鍋・釜	14	0.9%	
	鉢	1	0.1%	
	他・不明	42	2.8%	
	小計	1521	100.0%	
瓦器	鍋・釜	17	20.2%	
	火舎・火鉢	65	77.4%	
	他・不明	2	2.4%	
	小計	84	100.0%	
美濃	灰釉	椀・皿	2	33.3%
	天目	椀・皿	2	33.3%
	鉄釉	壺・瓶	2	33.3%
	小計	6	100.0%	
焼締陶器	備前	壺	3	11.5%
		擂鉢	1	3.8%
	信楽	壺	1	3.8%
		擂鉢	7	26.9%
	産地不明	甕	13	50.0%
		その他	1	3.8%
小計	26	100.0%		
輸入陶磁器	白磁	椀・皿	9	50.0%
	青磁	椀・皿	5	27.8%
	染付	椀・皿	4	22.2%
	小計	18	100.0%	
総数		1655	100.0%	

表4 SX56上層出土土器の構成

種類	器形	破片数	比率		
土師器	皿	997	94.9%	88.1%	
	鍋・釜	28	2.7%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	丸底鉢	4	0.4%		
	小型壺	1	0.1%		
	塩壺	2	0.2%		
	他・不明	19	1.8%		
	小計	1051	100.0%		
瓦器	火舎・火鉢	53	89.8%	4.9%	
	壺	1	1.7%		
	他・不明	5	8.5%		
	小計	59	100.0%		
美濃	灰釉 椀・皿	2	28.6%	0.6%	
	天目 椀・皿	3	42.9%		
	鉄釉 壺	1	14.3%		
	志野 向付	1	14.3%		
	小計	7	100.0%		
唐津	灰釉 椀・皿	4	40.0%	0.8%	
	壺(徳利)	1	10.0%		
	絵唐津 椀・皿	3	30.0%		
	向付	1	10.0%		
	その他	1	10.0%		
	小計	10	100.0%		
軟質施釉	黒釉 椀・皿	1	100.0%	0.1%	
	小計	1	100.0%		
焼締陶器	備前	壺	1	100.0%	0.1%
		小計	1	100.0%	
	信楽	甕	1	9.1%	0.9%
		搦鉢	10	90.9%	
		小計	11	100.0%	
	丹波	搦鉢	1	50.0%	0.2%
		盤・大皿	1	50.0%	
		小計	2	100.0%	
	産地不明	甕	17	73.9%	1.9%
		壺	3	13.0%	
搦鉢		2	8.7%		
他・不明		1	4.3%		
小計		23	100.0%		
輸入陶磁器	染付 椀・皿	15	53.6%	2.3%	
	白磁 椀・皿	9	32.1%		
	青磁 椀・皿	4	14.3%		
	小計	28	100.0%		
総数		1193		100.0%	

この土器群の特徴は、京都国立博物館構内から出土した方広寺関連のものと類似しており、豊臣秀頼による安楽寿院再興期を前後するものとして良いだろう。塩壺とその蓋(54・55)は火を受け、橙色に変色している。身の内面には布目が残る。羽釜(56)は甕形の体部下方に短めの鐳を付けた形態である。内面に薄く炭化物が付着している。焙烙は細片が多く、口縁部だけを図示した(57)。このほか土師器ではミニチュアの搦鉢(58)や小型の鉢(59)が出土している。

瓦器では瓦燈(60)と蓋(61)を図示した。このほか火鉢類の破片が多数出土しているが、細片が多く図示できなかった。国産施釉陶器では美濃灰釉皿(62)と絵唐津鉢(63)のほか志野鉢・軟質施釉陶器(黒釉)椀などがある。

焼締陶器は丹波盤(67)以外に備前壺、信楽甕・搦鉢などがある。

輸入陶磁器には明染付の大皿(64)、皿(65)、白磁皿(66)などがある。

軒瓦・鬼瓦(図版3・4、図9)

平安時代後期の瓦類には、丸瓦・平瓦の他、軒丸瓦(68~75)、軒平瓦(76~79)、鬼瓦(80・81)がある。瓦類のすべては平安時代の遺構に伴うものではなく、整地層や後世の遺構から出土したものである。

軒丸瓦68は珠文のない三巴文で、焼成はやや軟質である。69・71は周縁と珠文のみが残り文様構成は明らかではない。71は硬質で自然釉が付着する。72~75は珠文を持つ巴文である。72は軟質の焼き上がりであるが、他の3点は硬質で自然釉が付着している。70は軟質で表面が著しく磨滅している。8葉の蓮華文で、中央には1+4の蓮子を配する。

76・77は唐草文軒平瓦。76は硬質である。78・79は剣頭文軒平瓦である。79は瓦の反りに対して筈が直線的である。

80は鬼瓦の左側珠文帯と目の一部である。硬質で表面には自然釉が付着している。81は鬼瓦の左下方部で、珠文帯と歯の一部が残存している。粘土を貼り付けて表現されていた類と牙は剥離している。珠文帯と歯は削りだして作られている。硬質の焼き上がりで自然釉がかかる。

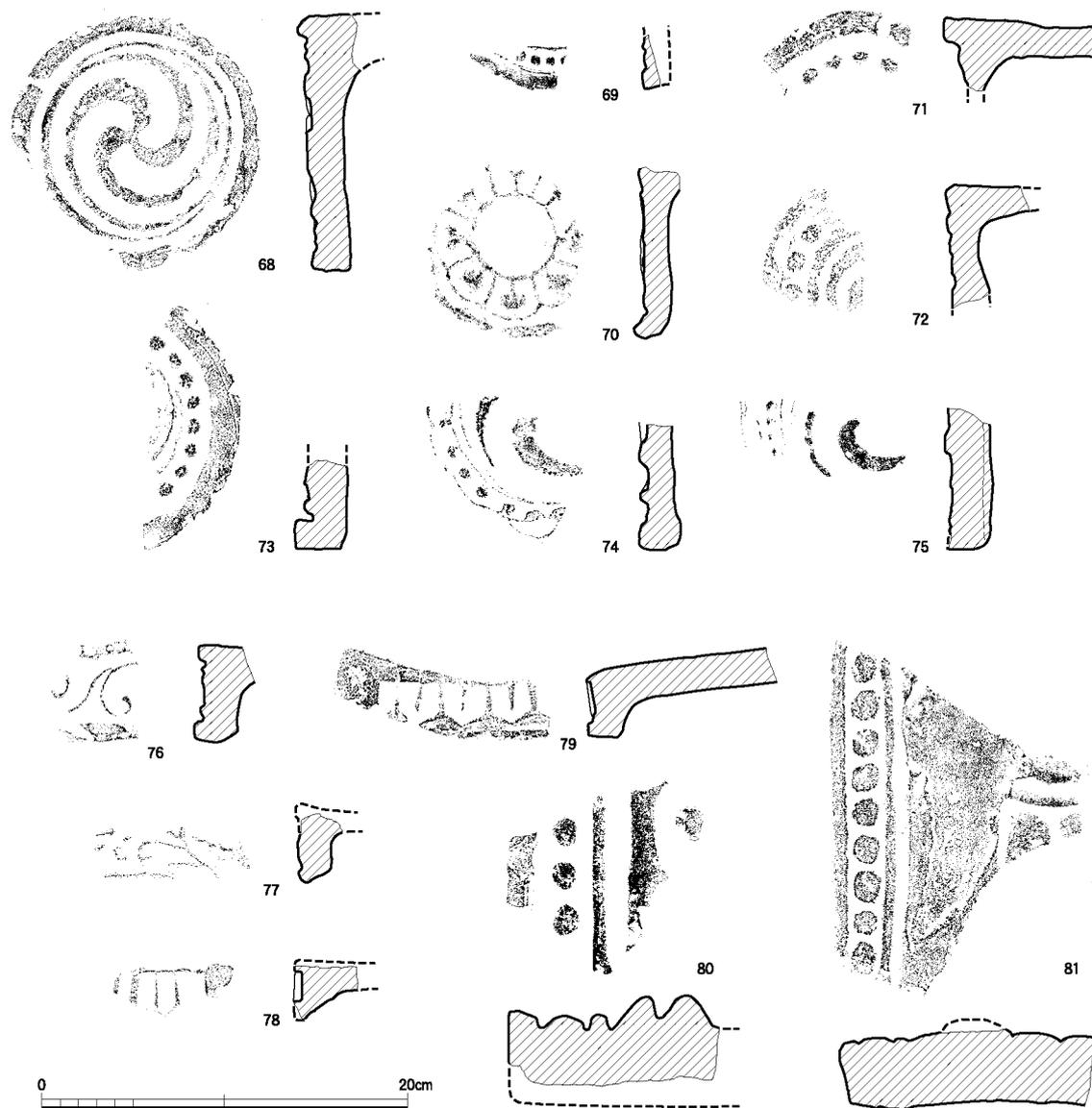
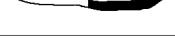
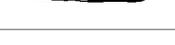
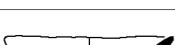
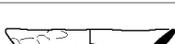
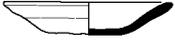
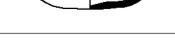
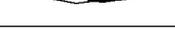


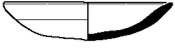
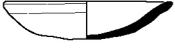
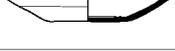
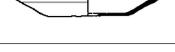
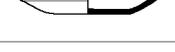
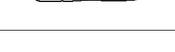
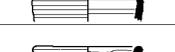
図9 軒瓦・鬼瓦拓影・実測図(1:4)

## 4.まとめ

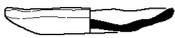
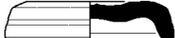
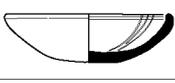
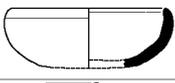
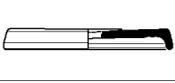
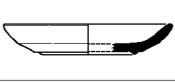
今回の調査の結果、鳥羽離宮期の池跡の一部と思われる湿地状の遺構を確認することができた。またこの池跡は離宮廃絶後も湿地状の地形あるいは流路の一部として存続し、戦国時代後期から桃山時代にかけて徐々に埋め立てられていったことが判明した。最終段階の埋め立ては出土遺物からみて、慶長年間の豊臣秀頼による安楽寿院再興に伴う可能性が高く、その段階にいたって後に塔頭の造営が可能な状況になったことが推測できる。また、江戸時代後期の塔頭である宝蔵院に関して、その前身の建物と思われる根石列を確認できた。ただ、秀頼の安楽寿院再興以前の遺物が出土する、埋め立ての初期段階についてはその契機を明らかにすることはできなかった。

付表1 SX56下層出土土器一覽表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
1		土師器 皿Nr	5.1	1.1		10YR8/2 灰白色	完存
2		土師器 皿Nr	5.4	0.9		10YR8/1.5 灰白色	完存
3		土師器 皿Nr	5.4	0.9		10YR8/2 灰白色	完存
4		土師器 皿Nr	5.5	0.9		10YR8/2 灰白色	完存
5		土師器 皿Nr	5.6	1.1		10YR8/2 灰白色	完存
6		土師器 皿Nr	5.7	1.1		10YR7.5/2 にぶい黄橙色	完存
7		土師器 皿Nr	5.9	0.9		10YR8/2 灰白色	完存
8		土師器 皿Nr	5.9	1.1		10YR8/2 灰白色	完存
9		土師器 皿Nr	6.2	1.3		7.5YR8/2.5 浅黄橙色	80%残
10		土師器 皿Nr	6.4	1.1		7.5YR7/2 明褐灰色	完存
11		土師器 皿Nr	6.4	1.1		10YR7.5/2 にぶい黄橙色	完存
12		土師器 皿Nr	8.0	1.5		10YR8/3 浅黄橙色	完存
13		土師器 皿Nr	8.1	1.7		10YR8/3 浅黄橙色	完存
14		土師器 皿Sb	8.2	1.5		2.5Y8/1 灰白色	25%残
15		土師器 皿Sb	8.4	1.5		10YR7/1.5 にぶい黄橙色	完存
16		土師器 皿Sb	8.6	1.7		10YR8/1.5 灰白色	25%残 灯明皿
17		土師器 皿Sb	8.6	1.9		7.5YR8/2 灰白色	30%残
18		土師器 皿Sb	8.8	1.4		7.5YR8/2 灰白色	完存
19		土師器 皿Sb	8.8	1.8		7.5YR8/2 灰白色	30%残
20		土師器 皿Sb	9.0	1.8		10YR8/1 灰白色	75%残
21		土師器 皿Sb	9.0	1.9		10YR8/2 灰白色	75%残

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
22		土師器 皿Sb	9.2	2.1		5YR8/3 淡橙色	40%残
23		土師器 皿Sb	9.5	2.2		7.5YR7/3 にぶい橙色	80%残 灯明皿
24		土師器 皿Sb	9.5	2.1		7.5YR8/3 浅黄橙色	95%残
25		土師器 皿S	10.2	2.1		5YR8/2.5 淡橙色	75%残 灯明皿
26		土師器 皿S	10.2	1.7		5YR8/3 淡橙色	25%残
27		土師器 皿S	11.9	2.1		5YR8/4 淡橙色	25%残
28		土師器 皿S大	12.0	2.0		10YR8/2 灰白色	90%残
29		土師器 皿S大	12.2	2.0		10YR8/3 浅黄橙色	50%残
30		土師器 皿S大	12.2	2.2		10YR8/2 灰白色	50%残
31		土師器 皿S大	12.2	2.1		2.5Y8/2 灰白色	25%残
32		土師器 皿S大	12.5	2.1		2.5Y8/2 灰白色	完存
33		土師器 皿S大	12.9	1.7		10YR8/1 灰白色	20%残
34		土師器 皿S大	13.2	2.1		10YR7/1.5 にぶい黄橙色	25%残
35		土師器 皿S大	13.3	1.8		2.5Y7/2 灰黄色	25%残
36		土師器 皿S大	13.6	1.9		2.5YR7/3 淡赤橙色	50%残
37		土師器 皿S大	14.2	2.1		7.5YR8/2 灰白色	40%残
38		土師器 焙烙	23.6	(4.0)		10YR7/2 にぶい黄橙色	25%残 底部片もあるが接合しない
39		瓦器 釜	24.8			器表 黒色 断面 灰白色	銚部最大径31.2
40		備前 壺	9.2			5YR3/3 暗赤褐色	20%残 胴部最大径12.5
41		美濃? 茶入	4.0			断面N7/0 鉄釉5YR4/3	胴部片あるが接合しない
42		青磁 椀	15.0	6.9	4.5	灰緑青色	第4層 高台端部以外を厚く施釉 体部外面に線刻により連弁をあらわす

付表2 SX56上層出土土器一覧表

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
43		土師器 皿Nr	6.8	1.1		10YR7/2 暗黄橙色	60%残
44		土師器 皿Sb	10.2	1.6		2.5Y6/2 灰黄色 断面黒色	20%残
45		土師器 皿Sb	9.9	1.6		5YR7/4 鈍い橙色	90%残
46		土師器 皿Sb	9.8	1.9		10YR8/2 灰白色	50%残
47		土師器 皿Sb	9.7	2.0		5YR8/4 淡橙色	完存
48		土師器 皿S	12.0	2.5		5YR8/4 淡橙色	25%残
49		土師器 皿S	11.2	2.2		5YR8/4 淡橙色	20%残
50		土師器 皿S	11.3	2.5		7.5YR8/2 灰白色	60%残
51		土師器 皿S	11.9	2.5		10YR7/4 鈍い黄橙色	30%残
52		土師器 皿S	12.9	2.2		5YR8/3 淡橙色	70%残
53		土師器 皿S	14.8	2.3		5YR8/3 淡橙色	25%残
54		土師器 壺壺蓋	6.7	1.6		10YR6/2 灰黄褐色	25%残
55		土師器 壺壺	5.5	9.2		5YR7/4 にぶい橙色	50%残 内面布目残る
56		土師器 釜	21.0			10YR8/2 灰白色	50%残 鏝径23.3
57		土師器 焙烙				10YR6.5/4 鈍い黄橙色	口縁部の小片
58		土師器 ミニチュア 擂鉢	6.4	1.9		7.5YR8/4 浅黄橙色	50%残 内面四方に3本単位の擂り目を施す
59		土師器 鉢	9.0	(3.6)		10YR8/3 浅黄橙色	25%残
60		瓦器 燈火器				器表淡赤灰色 内面黒色	口縁部の小片 被熱のため外面赤変
61		瓦器 火消し壺蓋	17.9	2.2		器表黒色 断面10YR8/1 灰白色	25%残
62		美濃灰釉 皿	9.9	1.8	5.5	釉2.5YR7/3 浅黄色	15%残 失透釉は失透
63		絵唐津 鉢 (向付)				5Y5.5/1 浅黄橙色	20%残 鉄絵あり 表面荒れる (二次被熱)

No.	実測図	器種・器形	口径	器高	底径	色調	備考
64		明染付 大皿				胎土N7/1 灰白色	10%残 高台部に砂付着
65		明染付 皿	11.8	2.4	6.8	胎土N8/1 灰白色	20%残 表面失透気味
66		明白磁 皿	12.2	2.7	6.6	2.5YR8/1 灰白色	20%残 高台部に砂付着
67		丹波 盤	26.5	5.3		7.5YR4/ 灰褐色	10%残

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とばりきゅうあと							
書名	鳥羽離宮跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-12							
編集者名	平尾政幸・山口 真							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とばりきゅうあと 鳥羽離宮跡 (148次調査)	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけだうちほたちょう 竹田内畑町	26100	1166	34度 56分 57秒	135度 45分 25秒	2004年1月 15日～2004 年2月17日	120m <sup>2</sup>	収蔵庫 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥羽離宮跡 (148次調査)	離宮跡	平安時代後期	池岸	平瓦・丸瓦・軒丸瓦・ 軒平瓦・鬼瓦				
		室町時代後期	自然流路、整地層	土師器・瓦器・青磁・ 国産施釉陶器・焼締陶器				
		桃山・ 江戸時代初期	根石列、整地層、 流路	土師器・瓦器・白磁・ 染付磁器・国産施釉陶器 ・焼締陶器				
		江戸時代後期	小溝、土塙、石組 み遺構、小礎石列	平瓦・丸瓦・土師器・ 国産陶磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-12

## 鳥羽離宮跡

発行日 2004年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961